

194

この地がおそらく私の終焉の地となるであろうことは間違いなからう。

195

たとえ西晋の羊祜のように、おのれの魂が峴山（湖北の襄陽）を恋しく思っても（どんなに京都を恋しく思っ  
も）

196

その骨が遠く離れた北方の燕に葬られるとしたらどうであろうか。（私の、この西方の僻地に生を閉じよう  
としている心情を察してもらいたい）。

197

（今となつては）さだめというものはあざなえる縄のようなものであると知った。

198

（私の）運命を（今さら）竹を折って占って将来を問うたところで何にならう。

199

以上この千言のうち、私の意（思い）を述べたが  
（この詩を読んで）いったい誰が専念に（私のことを）憐れんでくれるというのか（そんな者は存在しない  
であらう）。

200